

頭をふっ飛ばされた死体が出たのは、今日六人目だった。

小さな家だ。メキシコの乾いた風が砂塵を巻き上げて、外から窓を叩いた。

そこに真っ赤な血がべつとりと貼り付く。七人目のクズ野郎の脳とのシェークだった。

「頼む……助けてくれ！俺が何やった？」

男はびいびい泣きながら跪き、無様な命乞いをはじめた。誰でもそうだ。多分同じ状況になれば誰だってそうするだろう。

「何やったって……わかってない？ ホントに？」

大きく、大きくため息をついた。彼女にとって銃口で

人を小突くのにはもう慣れっこになってしまった。

「そ、そうだよ！確かにコカインの売上はピンハネした！それは認める！この家の地下に埋めてある！でもそれは、組織のためだ。神に誓って私欲のためじゃねえ！」

また女はため息をついた。意志の強い黒眉とは対象的に、金色に染めた髪を編み込んで、後ろで団子状に纏めている。

着ているのは、モノトーン調の落ち着いた色のクラシカル・メイド服であった。ロングスカートは足元すら隠しきり、首や手首はロングネックのインナーでほとんど覆い尽くしている。両手は白い手袋——その先には白銀のブローニング・ハイパワー。

異様な風体である、と言えた。こんなところにメイドがいるわけでもなく——ましてや左目のまわりに茨が侵入するようなタトゥーが張り巡らされているようなメイドがいるわけもない。

「私欲じゃない？」

「そ、そうさ。いざという時に貯めて投資！組織に貢

献するための隠し財産つてわけよ」

「そうじゃああなたは組織のために貢献する気がある。そういうことでいいの?」

「もちろん! もちろんさ! クソ貢献しまくるつもりだよ、アミー……」

男の頭をふつ飛ばすのには慣れ過ぎていた。熱を帯びた空葉莢が床に落ち、甲高い金属音を鳴らしながらダンスした。

「誰がアミーゴだ、くそ野郎。いつ私が男と友達になっただんだ?」

女は血飛沫が自分のお気に入りの服にべっとりついて、いることによく気づいて、三度目の大きなため息をついた。

脱ぐしかない。一秒だって長くここにいたくはないが、それ以上にお気に入りの服に男の血液がついている事実はいただけない。

ついでにシャワーを浴びてしまおう。女は外の車——メタルカラーのS15のトランクルームからスーツケースを取り出し、今来ているものと全く同じメイド服を

持って、シャワールームへと向かった。

女の全身があらわになると、彼女のなめらかで少し浅黒い肌へ、まるでキャンパスに描くようにタトゥーが施されているのがわかる。

幾何学模様——トライバルと呼ばれるタトゥーが、全身に描かれている。首から上以外に、タトゥーがない場所がないくらいだ。下手をすれば服を着ているようにさえ見えるだろう。彼女の消えることのない復讐心の証が、このタトゥーだった。

この模様が消えない限り、彼女は——アドリアナは永遠に復讐を望み続けるだろう。

死体だらけの家から出て、S15に乗り込み、仕事終わりの一服——『ニューク・パープル』と呼ばれる紫色のタバコに、銀色のガス・ライターで火を点けたところで、無造作にダッシュボードに置いていたスマホの通知ランプが光っていることに気づいた。

うだるような車内。エアコンが効くには時間がかかる。聞きたくもない男の声を聞くには落ち着かない気分だったが、報告だけはさっさとしなくてはなるまい——。

『今回もうまく行ったか、アミーゴ？』

「あんたと友達になった覚えはないね——まあ、全員ブチ殺しておいた。金は家の地下にあるだと。約束通り確認してないし部屋にも入ってない」

『いい仕事だ。金はどうでもいいんだ。今回は見せしめだ。最近、組織のメンバーがどうにもたるんでやがる。密入国のビジネスのほうに興味があるからか分からんが、ヤクの仕事を末端にやらせて、監督もしねえ連中がいやがる。挙句、組織の金をくすねようなんて、バカな奴らさ』

「だろーね。やつら、組織のためだと最期まで言ってた」

『アド、お前がわざわざメキシコまで出張って殺つたんだ。しばらくは真面目にヤクを売るだろうさ。札を言うぜ』

顔も知らぬ組織の幹部に札を言われても、何も嬉しくはない。ああ、ムカつく。早く帰って定期購読している

ファッション誌の最新号が読みたい。新しい服と靴、トータルコーディネートで二、三着は欲しい。

『アド。早速で悪いんだが——ニューメキシコまで来てもらえねえか。場所はブエナ通りのバーガーショップなんだが』

「奢ってくれるわけ？ バーガーって気分でもないんだけど」

『違う。仕事の話なんだ。うちじや、あんたに頼むしかない。『死の聖母』サンタ・ムエルタさまじやなきや、やれねえ仕事だ』

二言三言交わした後、アドは電話を切った。仕事は大事だ。金も。二、三着でなく、五、六着は服を買い取るかもしれない。くだらない二つ名だって、多少はそれに貢献してくれる。アドにとって、それはとても大切なことなのだ。

「……バーガーショップね。どうせならサンドイッチにしてくれば良かったのに」

S15のアクセルを押し込み、タイヤが砂塵を巻き上げた。荒野の先にアメリカを隔てる高い壁が見えて——アドはそれを乗り越えるために、多くの人間が拒む場所

——検問所へと向かった。

ニューメキシコ州。

ほとんどメキシコ、という言葉を実現したような、文字通り乾いた街。雑多な脇道の陰で薬物の売買が普通に行われ、キマったままうずくまっている連中がゴミと一緒に転がっている。

アドはそれを横目にハンドルを切り、大通りの一角にあるバーガーショップ——C・バーガーなる店の前に駐車し入ると、客は男が一人だけだった。

その男はチーズバーガーを食っていた。黒人で、なんとか仕立てたスーツを着込んでいるが、すげえ太<sup>デブ</sup>つてるのは隠しきれない。うんざりするほど太っている。水を入れて膨らませたコンドームみたいな腹をしていて、アドはとにかく不快になった。

他に人は居ない。店員の姿も今は見えない。ならばこの男が、組織から何かしらの連絡を受けている人物とい

うことになる。

「君がアド？　組織の仲介<sup>カッタウト</sup>から話は聞いている。座んなよ」

アドは彼の斜め向かいに座ると、ここまで飛んできていたレタスをつまみ上げ、地面に叩きつけた。

「ここは、我々の偽装店舗だね。実際に経営してる。自慢じゃないが、パテは一流国産牛、パンは全粒粉。チーズはイタリアから取り寄せてるらしいぞ。それが全部タダ。酒が出れば完璧なんだが——」

「口がくせえ」

アドは聞こえるように言った。

「なんだって？」

男はチーズバーガーから口を離れた。

「口がくせえんだよ。組織から聞いてねえなら教えてやるが、わたしはお前みたいな不潔でデブった男は嫌いなんだ。いやそもそも男と話すこと自体が嫌なんだよ。百点満点すでにマイナス五十点だ。私は人間を減点方式で見てる。もう一回不快な話題を振ったらマイナス百点。神の下へまだ旅立ちたくないなら言葉に気をつける」

鈍色に光るプローニング・ハイパワーが、机の上で音を立てた。男は何がおかしいのか、汚い断面のチーズバーガーをトレイに置いて笑った。

「前情報どおりだね。結構。私のことはチーズバーガーとでも呼んでくれ。——仕事の話に入ろう。簡単なピズだが、失敗できないんだ。……それに、場所がネックだね」  
「場所？」

「ああ。アメリカ東海岸。グリーンウェル州オールドハイト市なんだ。君達の組織は相当腕が立つ連中揃いと聞いている。その中でも君はトップクラスだと」

アドの所属するカルテルは、メキシコを中心とした南米全域に広がる薬物密売組織のコングロマリットである。

各組織でそれなりの実働部隊を抱えている中でも、単独での仕事をこなせる者は少ない。アドは中でも指折りの暗殺者だ。

しかし、指折りとはいえ、アドでなければならぬ理由は別にある。彼女はもうそれに気づいていた。

アドはこの街——ニューメキシコ出身のメキシコ系ア

メリカ人なのだ。組織はシカリオとしての才能と、国籍に目をつけ、アメリカとメキシコを行き来できる存在に仕立て上げた。アドは、オールドハイト市に行くことができる貴重なシカリオの一人なのだ。

「理由はわかった。ピズの内容は？」

できるだけクールに、可能な限りスマートに。話したくない連中にはそれが一番だ。アドはシカリオに対する顧客のニーズがどのようなものであるのかよく分かっていた。

「オールドハイト市の北部に、ノース・ユーロ・ヴィレッジという高級住宅街がある。その奥にある、ダン&ブラウン・プリントインクという会社の創業者——アール・B・ブラウンという男の自宅。そこからブツを取ってきてほしい。店の前のクルマは君ののか？」

「ああ」

「じゃ、あれを使えば運べる程度のものだ。届け先の場所はオールドハイト南側の州境。ガス代と、君の車に起こったトラブルについて全額保証した上で、報酬は即金で五万ドル用意する。悪くないだろ」

「ブツは何？」

当然の質問だった。運び屋はブツの内容によってはかなりのリスクを伴う。ヤクの運び屋で警察に捕まりなどしたら、男も女もなく前も後ろも上も下もほじくり返される。

組織の依頼とはいえ、可能な限りリスクは減らしておきたいと考えるのが、アドのビジネス方針だった。

「言えない」

「マイナス三十点だぞクソデブ。天国行き片道切符の予約か？ もういつべん聞く。ブツは何？」

「我々の都合であることは承知しているよ。それでも言えないんだ。それ以上聞かないでくれるのなら、報酬額の上乗せも——」

アドは立ち上がった。何を言うまでもなく、断るためだった。何かわからないブツを運ぶなど、自殺行為だ。彼女の短い人生で学び取ったカンが、そう行動させた。受けられる話じゃない。

彼女の意志は固かった。目の前でシャッターが降り、バーガーショップの店員達が銃を構えているのを見るま

では。

「悪いが、話を聞いた以上は受けてもらうしかないよ、アド。これは君の組織も承知している」

知っていたさ。アドは舌打ちする。組織は組織としての利益のために動く。個人におもねることなどなく、都合が悪くなれば即切り捨てる。予想外だったのは、このチーズバーガーとかいうデブは、組織にとってアドより都合が良いヤツである、という点だ。

「私を殺すのに躊躇ないって顔してるな」

「カルテルは君で無理なら別のシカリオを送ると言っている。わざわざシカリオを使うのは、それなりの危険を伴うからだ。我々も後がなくてね。可能な限り選り好みをさせてもらうつもりさ」

残りを口に放り込むと、チーズバーガーはぺろりと親指を舐めた。ブローニングで、この男をバラすのは簡単だ。他の連中も——リスクはあるが、殺れるだろう。

しかし『殺しに行く』のと、『殺されそうところから脱出する』のは違う。銃弾を叩き込まれて平気なツラできる超人ならまた別だろうが、アドにはその自信は無

かったし——何より痛いのは苦手だ。

「——分かった。分かったよ。やりや良いんだろ。銃は降ろせ。お気に入りの店をケチャップまみれにしたかないだろ」

メイド服の下で、冷や汗が流れたような気がした。チーズバーガーは口角を上げて、周りの連中を手で制し、名刺——QRコードが印刷されている——を差し出した。逆に言えば、それ以外には何も記載されていない。

「これは？」

「大事なものだ。バラしてしまうと、今回のビズの依頼人は会社カバニなんだ。これはサーバーのファイルにアクセスできるURLが仕込まれてる。ブツの一個目はそのデータ。もう一つは、そのデータの中に書いてある。引き渡し場所の詳細な座標データもね」

ブツは二つ。支援はなく、もう降りることはできない。最高に最悪だ。組織だつてもう、ケツを持ってはくれないのだ。

「なんで創業者の家からわざわざブツを、私なんかを使って持つてく必要がある？」

「『必要がある』からさ。残念だが君にそれ以上質問はしてもらいたくない。いいかいアド。もう君は降りられない。地獄の淵から落っこちないように行くしかないのさ」

チーズバーガーは、手を紙ナプキンで拭くと、裏口から出ていった。話はそれで終わりだ。やらなくてはならない。できなければ——お気に入りの服が、オート・クチュールの前衛デザインみたいに穴ボコだらけになるだけだ。

暗殺者シカリオは、そういう消耗品で——それ以上の価値なんてないのだ。どんなに高級品で着飾っても、服の自身にはそれほど価値がないように。

「最悪——」

アドはキーホルダーを指で回しながら、自分の全身に鉛が充填されているような感覚に陥っていた。

グリーンウェル州オールドハイト市。摩天楼の伸びる

ビル群に支配された街。一年中発生する霧によって、ありとあらゆる悪事が覆い隠されると評判の犯罪都市でもある。

ハイウェイを降り、車を走らせながら、セントラルパークの自然を横目に、アドはどことなく不安が膨らんでいくような気持ちがしていた。

何かわからないブーツを運ぶ。それだけでも相当なストレスだが——あのチーズバーガーという男の正体がわからないのも不気味だった。

組織が、暗殺者としてのアドを軽んじるのは今に始まったことではない。御大層な名前がついても、アドは所詮消耗品だからだ。

それでも、報酬やバックアップは最低限整っていたし、仕事の都合がつかない時は断りを入れることだってできた。何より不可思議だったのが、組織を嘔ませずに直接チーズバーガーを紹介してきたことだ。

てっきりあの場に仲介人がいるのかと思いきや、その素振りもなく、その後のフォローもない。

嫌な予感しかない。

アドはハンドルを切り、高級住宅街——ノース・ユーロ・ヴィレッジへと入っていった。なるほど、セントラル地区から広がるビジネス街と比べて、風光明媚で自然に溢れた静かな住宅街である。歩道にチリ一つ落ちていないし、生け垣はきれいに剪定されている。シミ一つない白い壁の豪邸が立ち並び、テニスコートでは中年の男女が試合に励んでいる——。

くだらない。あんなこととして楽しいのか？ 金にもならないのに。

アドはアクセルを踏み込んでさらに奥へと入っていく。目の前に広がった光景に、彼女はうっと声を詰まらせた。

高級住宅の親玉がそこにいた。雑誌で一流パピコレモデルの自宅を見たことがあるが、あれの四倍はデカイ。鉄格子で閉ざされた門の前に車を止めると、センサーが働いているのか、まるで導くように扉が開いた。チーズバーガーは何も言っていなかったが、好都合だ。どちらにしろ、ブーツを載せなくてはならないのだから。

きれいに整えられた天然芝でできた庭が広がり、滑ら



かに舗装された白い道路が屋敷へと伸びる。玄関の前に停めると、アドは紫色のタバコ——ニユーク・パープルを銜えながら、プロローニングのマガジンをチェックしてから、それを戻す。

銀色のライターで火を点けて、一服する。一気に吸って、吐く。そして、愛車の灰皿に——山盛りの吸い殻に突っ込む。仕事前のゲン担ぎだ。

うんざりするほどデカイ玄関扉は、小突くだけで簡単に開いた。電気がついておらず、人の気配はない。プロローニングの銃口を向けながら、一応のクリアリングを行う。壁にへばりついて、右、左。

スマホを取り出して、チーズバーガーに渡されたQRコードを読み取る。ここにくるまでに読み取ってみたが、サーバーエラーでアクセスできなかった。

ITに詳しいわけではないが、想像はつく。サーバーはサーバーでも、いわゆるオープンネットワークに接続していないもの——つまりこの屋敷内だけつながるクローズドなサーバーなのだろう。

すぐにダウンロードが始まって——終わった。読み込

めないよくわからないデータと——。

「Read Me? めんどくさいな……」

合流先の住所が記載されている。これは前情報どおり。

ブツの目録——先ほどダウンロードしたデータと——。

「二階の奥の部屋にいる——いる? いるってなに?」

ネコとか犬?」

警戒しながら階段を登る。相変わらず人の気配がない一階と違って——物音がするようになった。奥の扉から光が漏れている。物音がし始める。誰かがいる?

アドの心臓の鼓動が早くなる。トリガーの位置を確かめる。シカリオの仕事は殺し合いだ。当然自分がブチ殺されるかもしれないという想像をする。殺る前はいつもそうだ。

息を整え、扉を蹴り、祈るようにその先にあるものへ銃口を向けた。

少年がベッドに腰掛けながら、アニメを見ていた。彼はゆっくりとこちらを振り向くと、少しだけ困惑したような表情を浮かべた。

「な、なんだお前……? このガキか?」

少年の瞳は白銀色をしていた。透き通るように白い肌  
に、白髪頭——そして一番に目を引いたのが、頬から鼻  
にかけての赤黒い痣であった。

そこら中に漫画本とスナック菓子の袋が転がついて  
て、なぜかそれに混じって分厚い専門書が山積みになっ  
ているのが妙だった。

「お前がブツ——か？」

「あ、う……」

少年は嬉しそうに笑ったが、声は——いや言葉は出な  
かった。白い綿のボトムスに、犬の絵がプリントされた  
シャツ——その上に、大人が羽織ってもなお大きそうな、  
緑色のモッズ・コートを着ている。

誰の趣味だ？ 一瞬そんな疑問が浮かんだが、次の瞬  
間にはそんなことは頭から吹っ飛んでいた。

少年がよりもよって、アドに抱きついてきたのであ  
る。正確には腰に——彼女は短く鋭い悲鳴をあげ、少年  
を振りほどこうとした。

気持ち悪い。

ブローニングの銃底でぶん殴ろうとも考えたが、冷静

なアドの思考に浮かんだある可能性が、それをなんとか  
思いとどまらせた。

二つ目のブツとは、このガキのことではないのか？

恐る恐るアドは、少年を見下ろした。胸のせいで若干  
見辛いが、こちらを見上げている。白銀色の目がこちら  
を見ている。子供の頃、捨て犬にエサをやっていたこと  
を思い出す。あの時は母親の彼氏が蹴り殺そうとしたの  
で、同じようにいつか蹴り殺してやると誓ったつけ——。

「——お前、言っとくけどな。マイナス十点だからな」

「う？」

少年は首を傾げた。話せないだけで、意思疎通はでき  
るらしい。アドは少年を引っ剥がすと、視線を——ねめ  
つけるように合わせてから言った。

なぜか彼は嬉しそうだった。

「離れる。私は男に近づかれるだけでムカつくんだ。た  
だ、私はお前を運ばなきゃならない。だから離れるな。  
でも近づくな。抱きつくな。次やったらマイナス二十点  
にする。マジでぶん殴る。わかるか？」

少年は少しだけ考える素振りを見せ、静かに頷いた。